



スポーツ庁委託事業
「Specialプロジェクト2020体制整備事業」(第3年次)

令和元年度
「Specialプロジェクト2020」

体制整備実践記録

令和2年3月
京都市立呉竹総合支援学校
京都市教育委員会

目 次

1. Specialプロジェクト2020体制整備事業の概要について

- (1) 事業の背景 P1
- (2) 実施の目的, 基本事項 P2
- (3) 実施校における事業実施体制 P3

2. Specialプロジェクト2020体制整備事業の活動について

- (1) 教職員向けのスポーツやアート研修会の実施 P4
- (2) 余暇体験サークルの取組 P4
- (3) スポーツ大作戦の取組 P4
- (4) 余暇フェスタ&くれたけまつりの概要 P6
- (3) 余暇フェスタ&くれたけまつりの様子 P8

3. Specialプロジェクト2020体制整備事業のまとめについて

- (1) 参加者数の推移 P12
- (2) 参加者数の推移の特徴 P13
- (3) 成果と課題 P13

1. Specialプロジェクト2020体制整備事業の

概要について

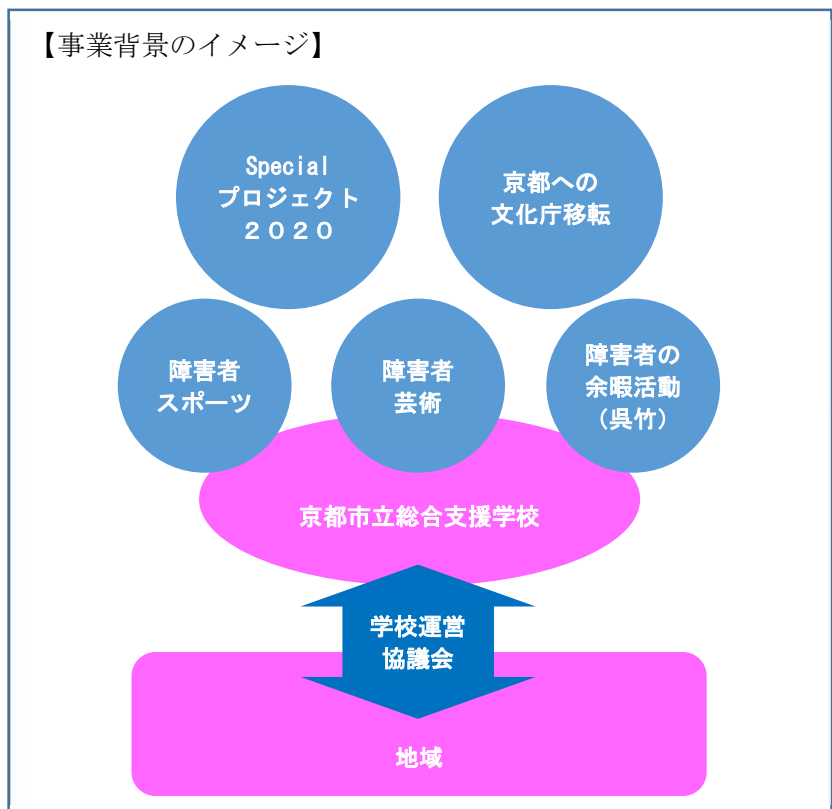
(1) 事業の背景・目的

本市の総合支援学校（特別支援学校）は、平成16年4月に、従来の障害種別ごとに基づく教育から、児童生徒が障害種別を超えてともに学び、一人一人の教育的ニーズに応じた教育を実施する「総合制」へ再編した。また、障害のある児童生徒が地域の中で豊かな生活を送り、地域に開かれた学校で学ぶことを目指して、京都市内を4つの通学区域に分け、障害種別によってではなく、居住地を通学区域とする総合支援学校へ通学する「地域制」へと転換した。

本市の総合支援学校には、8校全てに学校運営協議会を設置しており、地域との結びつきも強い。総合支援学校で実施している運動会や文化祭だけではなく、夏祭りや秋祭り等にも地域の方々が参加され共に活動したり、地域の自治連合会等が主催するお祭りや運動会等に総合支援学校教職員や生徒が参加して共に活動したりする等、「地域に開かれた学校づくり」を推進している。

また、学校では、フライングディスクやボッチャ、卓球バレー等の障害者スポーツを始め、野球、ソフトボール、卓球、陸上等の運動部活動も盛んに行っており、全国障害者スポーツ大会にも数多くの総合支援学校生徒や卒業生が出場している。さらに、地域の障害者スポーツ団体等に、総合支援学校のグラウンドや体育館を貸し出す等の取組も行っており、地域の障害者スポーツの振興の一端を担っている。

文化・芸術活動についても、授業や部活動、余暇活動等の時間を利用した表現・制作活動等も積極的にを行っている。さらに、本市においては、NPO法人「障害者芸術推進研究機構（通称：天才アートKYOTO）」（以下、「天才アートKYOTO」と記載）との協働のもと、学校の取組を通じて、そういった表現や制作に素晴らしい能力を発揮した障害のある児童生徒が、在学中あるいは学校卒業後も継続して創作活動ができる場を確保し、その作品の展示等も行う「障害のある方の芸術活動支援事業」を実施し、障害者芸術の振興にも取り組んでいるところである。



一方、京都への文化庁移転の決定を受けて、京都に息づく「日本伝統の生活文化、精神文化や多彩な文化芸術」のさらなる振興・発展に取り組んでいく必要があり、「天才アートKYOTO」と協働で取り組んでいる障害者芸術の一層の振興・推進も求められている。

今回の委託事業の実施校である、呉竹総合支援学校では、自校児童生徒のみならず、他の総合支援学校や通学区の小中学校の育成学級（特別支援学級）児童生徒をも対象に、障害のある子どもが地域の中で充実した余暇活動が行えるようになること、そのためのネットワークの拡大を図ること、それによりスポーツ・芸術活動の振興や子どもの健全育成を図ることを目的として、PTAが主な運営主体となり月1回程度、5つのサークルを実施する「余暇体験サークル」を14年にわたって実施してきた。

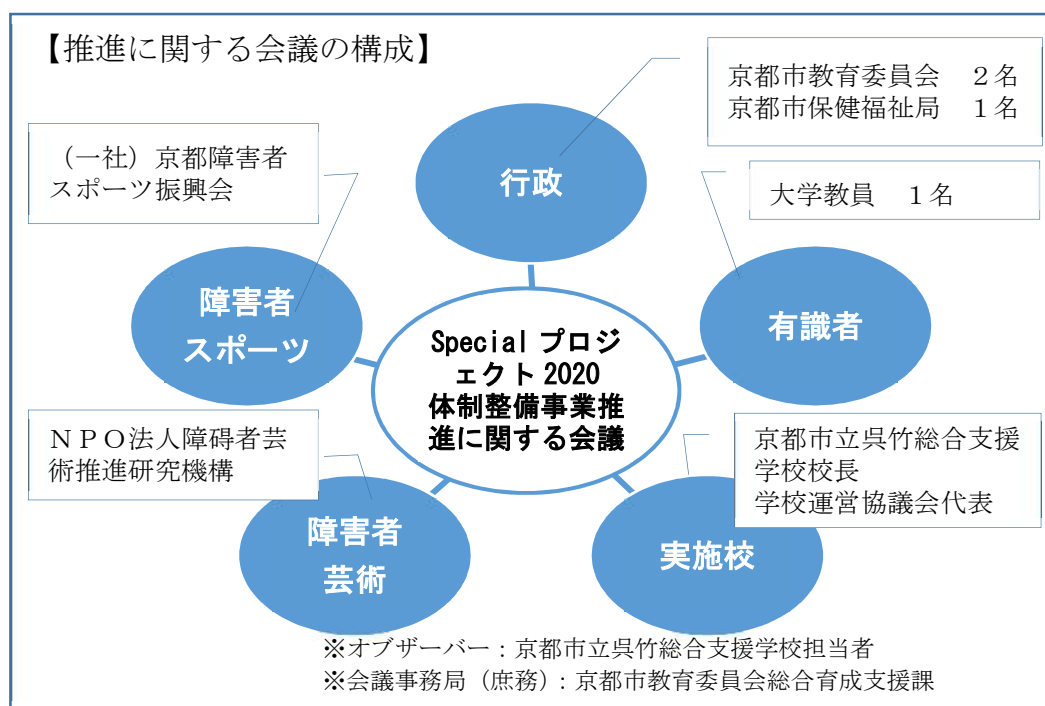
そして、平成29年度から「Specialプロジェクト2020」事業を受託し推進する中で、これまでの取組のそれぞれを関連づけ、より充実・発展させ、障害者スポーツや芸術の体験・交流を通して、障害の有無に関わらず人々が理解しあえる祭典を開催するために、その開催のための実践事例の蓄積と実施に係るノウハウの開発に取り組んだ。

障害のある子どもと保護者や地域の方々が一緒にスポーツや芸術を楽しんでいただくことで、障害の有無に関わらず、理解や関係性を広げ、最終的には、総合支援学校が、障害の有無や年齢・性別を超えた共生社会の拠点となることを目指すものである。

(2) 実施体制・推進に関する会議

本事業の推進のために、「Specialプロジェクト2020体制整備事業推進に関する会議」を設置し、実施校を支援する体制をつくった。上記推進会議では、実施校による立案の確認・助言、中間報告への助言、最終報告への助言等を行い、体制事業を推進した。推進会議は下記のとおり、行政、有識者、実施校、障害者芸術関係者、障害者スポーツ関係者で構成した。

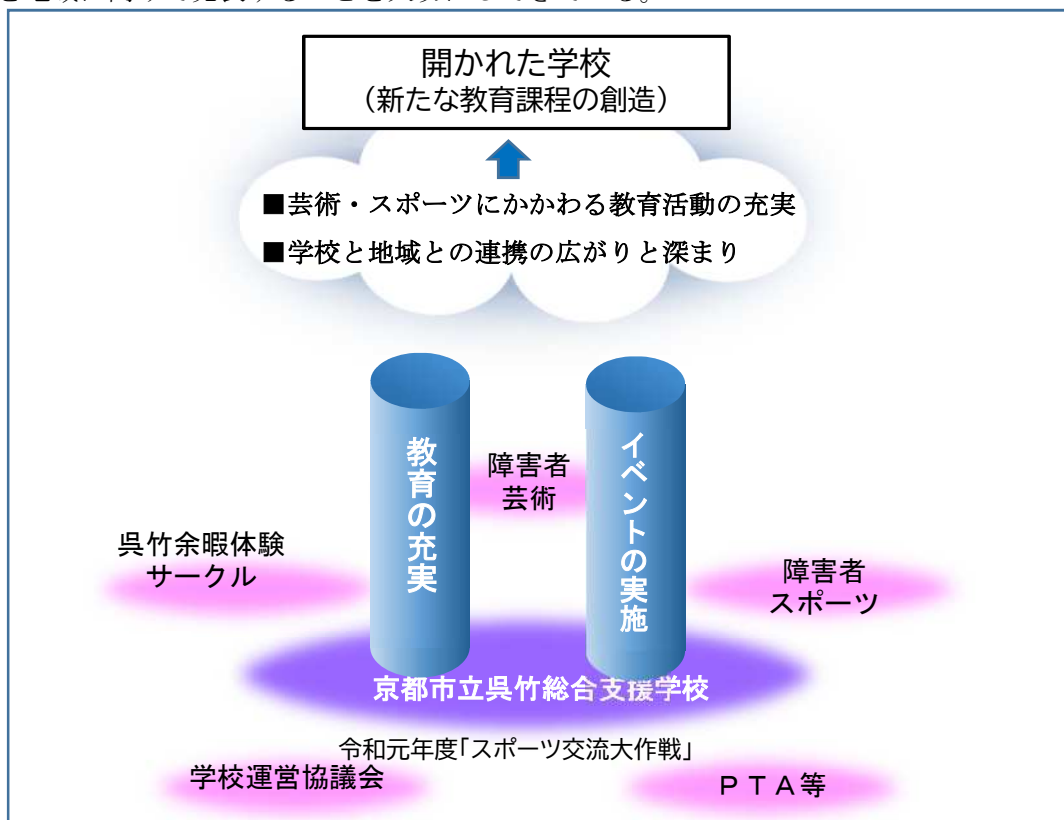
【Specialプロジェクト2020体制事業推進に関する会議委員】
 大学教員、京都市教育委員会、京都市保健福祉局、京都障害者スポーツ振興会、障害者芸術推進研究機構、京都市立呉竹総合支援学校校長、同学校運営協議会代表



(3) 実施校における事業実施の体制づくり

事業の具体的な企画、運営は実施校の呉竹総合支援学校が行っている。当校は、平成20年度から芸術活動やスポーツを通じて、児童生徒の才能の伸長を図ってきており、また平成18年度から余暇体験サークルを立ち上げ、保護者や地域との連携の下、児童生徒の文化芸術的活動や、スポーツ等による障害のある子供達の余暇を充実させる取組を、継続的に行ってきた。平成29年度から本事業の取組を行うにあたり、これまでの芸術活動やスポーツ、余暇活動の取組をさらに充実させるとともに、これらの活動を基にした年に1回のイベントを実施してきた。このイベントは「くれたけまつり」（令和元年度は「余暇フェスタ&くれたけまつり」と銘打ち、日常の芸術活動、余暇活動の成果を発表するとともに、地域の方々が集い、スポーツや芸術を楽しむイベントとして開催してきた。

本校では、これらの取組を軸に平成29年度から、日常の授業やイベントに係る障害者芸術関係者、障害者スポーツ関係者と連携して校内のプロジェクト活動、S（スポーツ）A（アート）プロジェクトを中心に事業を推進してきた。障害者スポーツ・障害者芸術関係の専門家による教職員研修や授業の指導助言などを行っていただき、教職員の指導力の向上や児童生徒の学習の充実を図ってきた。また、本校では「地域への発信・地域での展開」をキーワードに日常の教育活動を行っており、スポーツでの交流や、芸術作品等を地域に向けて発表することを大切にしている。



令和元年度からは、本委託事業が終了した後も持続的に実施可能な取組とするため、「校内のプロジェクト」としての位置付けから、開かれた学校に向け「日常の教育活動の柱」として新たに企画した「スポーツ交流大作戦」の取組に位置付け、その結果、日頃からの教育活動の充実はもとより、イベントの企画・運営が円滑に行えるようになり、また、スポーツや芸術活動を通じて地域とつながる活動が継続できる体制ができたと考えている。

2. Specialプロジェクト2020体制整備事業の 活動について

(1) 教職員向けのスポーツやアート研修会の実施

令和元年度は専門家による指導助言とともに、教職員の指導力・専門性の向上をめざして、教職員対象の障害者スポーツ、障害者芸術の自主参加の研修会を行ったところ、両研修とも約50名の参加者があった。

障害者スポーツ研修はボッチャをはじめとする障害者スポーツの体験を通じて、ルール理解や指導方法の検討などを行った。ボッチャ等を体験したことのない教員も多く、誰もが楽しめるスポーツであることを実感できたとの多くの感想が聞かれた。

障害者芸術に関しては、「芸術とは何か？」という障害者の枠にとらわれない芸術の概念を知ること、言葉によらない表現を知り、児童生徒の芸術分野での可能性を感じ、授業の在り方を振り返る良い機会となったとの感想が聞かれた。また、平成29年度から行われている月に1回程度の専門家によるアート系の授業への指導・助言も継続した。

スポーツ・芸術ともに、児童生徒が主体となった授業づくりの基盤となる研修となった。

(2) 余暇体験サークルの取組

写真サークル、和太鼓サークル、リラックスサークル、アウトドアサークルの4サークルが、月1回土曜日に実施した。

(3) スポーツ交流大作戦の取組

今年度は、地域の小中学校へのボッチャや卓球バレー用具の貸出をしたり、市内の総合支援学校や地域の小中学校との障害者スポーツ交流を行ったりしてきた。

〈地域の学校へのボッチャや卓球バレー用具の貸出〉

貸出日	貸出校	物品
11月18日～3月中旬	A小中学校	卓球バレー用具
1月8日～3月中旬	A小中学校	卓球バレー用具
1月8日～3月中旬	A小中学校	ボッチャ用具
2月10日～2月27日	B高等学校	ボッチャ用具

〈京都市総合支援学校との交流〉

実施日	相手校	場所	対象学年	呉竹生徒数	相手校生徒数
10月 1日	西総合支援学校	西総合支援学校	中学部1年	16名	17名
11月28日	東総合支援学校	東総合支援学校	中学部2年	13名	10名
12月16日	北総合支援学校	北総合支援学校	中学部3年	10名	25名
1月28日	西総合支援学校	呉竹総合支援学校	中学部1年	16名	17名

その他に、近隣の小中学校との交流及び共同学習（小学校1校・中学校1校）では他の活動とともにポッチャ交流なども行った。

〈総合支援学校との交流の例〉

- ・音楽表現スペースにて集合し、挨拶、自己紹介
 教員だけで運営するのではなく、生徒に司会や開会挨拶を担当させるなど、生徒が主体的に楽しめるような体制作りに取り組んだ。
 ↓
- ・各グループに分かれ、活動
 - ・エアトランポリン
 一回の利用可能人数を考慮し、順番で使用した。個々の障害の違いにより、寝転ばせて使用させるなどした。
 - ・ボウリング
 学校ごとのチーム戦。児童生徒の能力によって、投球位置を変える、玉はバスケットボールを使用するなど、どの生徒も楽しめるように工夫した。
 - ・ポッチャ
 学校ごとのチーム戦。肢体不自由の生徒は側に玉を滑らせる台を設置して、そこから飛ばせるように工夫をした。最後に点数を全員でカウントし、盛り上がった。
 ↓
- ・まとめ、挨拶
 （手作りのプレゼントを交換など）



開会式の様子

ボッチャの様子



校内のプロジェクトとしての位置付けから、日常の教育活動の柱として位置付けたことで、日常の教育活動の充実はもとより、イベントの企画・運営が円滑に行えるようになった。また、とりわけ、本校だけの取組にとどまることなく、他の市内の総合支援学校や地域の小中学校と交流することによって、本事業が目指す障害の有無や年齢・性別を超えた地域の共生社会の拠点に向けて着実に前進するところである。児童生徒にとっても、他校の生徒との関わりは良い刺激となる。協力して開式や閉式をしたり、ボッチャなどスポーツに取り組んだりすることで、一体感が生まれ、最後に見送る際の「また来てね」という声が印象的であった。

(4) 余暇フェスタ&くれたけまつりの概要

日常の芸術活動、余暇活動の成果を発表するとともに、地域の方々が集い、スポーツや芸術を楽しむ場として以下の要項で「余暇フェスタ&くれたけまつり」を開催した。(余暇フェスタ：余暇体験サークルが毎年行ってきたイベント本事業でこれまで行ってきたイベントは「余暇フェスタ」をベースにしている)

1. 日 時

令和2年2月8日(土) 10:30~13:00

2. 目 的

- 学校と地域の連携・協働による地域コミュニティの構築を目指して、地域に開かれた学校づくりを進める
- 卒業後の社会参加機会を拡大するために、本校及び呉竹余暇体験サークルと地域や他団体とのネットワークづくりを進める。

(5) 余暇フェスタ & くれたけまつりイベントの様子

くれたけソーラン



オープニング



余暇体験サークル発表



ICT サークル演奏



教職員ダンス披露



落書きコーナー





ストリートパフォーマンス



パラスポーツ体験





販売風景



展示風景

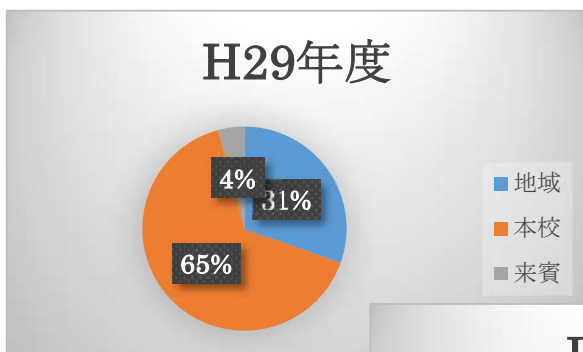
3. Specialプロジェクト2020体制整備事業の まとめについて

(1) 参加者数の推移

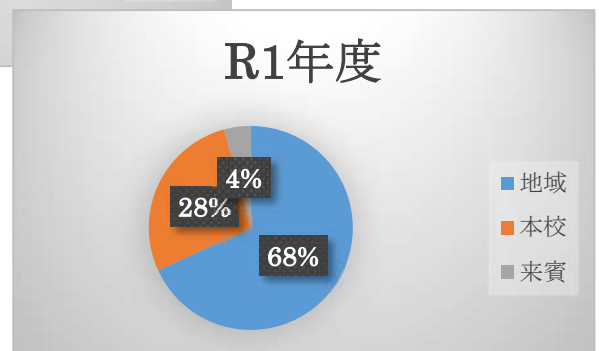
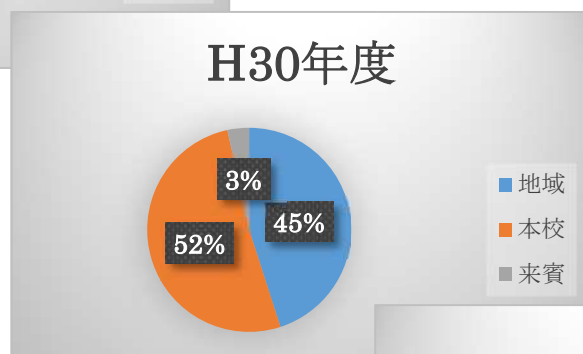
平成29年度から京都市において取り組んだ「Specialプロジェクト2020体制整備事業」をイベントの参加状況から振り返る。

	平成29年度		平成30年度		令和元年度	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率
地域	118名	30%	209名	54%	323名	83%
実施校児童生徒・ 保護者・教職員	253名	65%	239名	62%	146名	38%
来賓等	16名	4%	16名	4%	20名	5%
合計	387名		464名		489名	

過去3年間のイベント参加数と比率の推移



過去3年間のイベント参加者比率の推移（グラフ）



上記の表の参加者の内訳は以下のとおりとなる。

地域：近隣地域住民，近隣小中学校の児童生徒，地域福祉事業所の利用者（卒業生も含む）

本校：児童生徒，保護者，教職員等

来賓：学校運営協議会委員，教育委員会関係者等

(2) 参加者数の推移の特徴

参加者数の増加

上記の数字は受付等での確認できる数字を基にしているため、正確な参加者とは異なるが、毎年の参加者数は増加していることが分かる。

本校はPTA主催のイベントを年に2回行っており、参加者は400人～500人集まっているのでほぼ同数の参加者である。ただしPTA主催のイベントは本校の児童生徒の参加が多く、今回の「くれたけまつり（「余暇フェスタ&くれたけまつり）」は地域からの参加が多くみられた。

地域からの参加数の増加

地域からの参加は、平成29年度は全体の参加者の31%、平成30年度は全体の参加者の45%、令和元年度は全体の参加者の68%と、毎年地域からの参加者数は大きく増えている

余暇体験サークルや児童生徒・教職員等の発表をはじめ、スポーツ、アート、物販と多岐にわたり、様々なニーズに対応できる内容のイベントを、3年間継続して実施してきたことが大きな要因であると考えられる。

また、令和元年度は障害者スポーツ体験の参加者が多かったことから、オリンピック・パラリンピックイヤーによる盛り上がりも大きな力となっていると考えている。

(3) 成果と課題

「Specialプロジェクト2020体制整備事業推進に関する会議」から

「Specialプロジェクト2020体制整備事業推進に関する会議」について、本年度は、第1回会議を令和元年10月30日に開催した（第2回は令和2年3月に開催予定であったが中止）。同会議において委員から、とりわけ、持続可能な取組としてさらに盛り上げていくためには、学校の生徒を中心とした活動から生涯学習につなげていくことが重要であるという意見をいただいたところである。こうした中で、本年度の「くれたけまつり」においては、情報発信の工夫や地域や福祉の関係者との積極的な連携により、内容のさらなる充実が図られたことで地域からの参加者が大幅に増加するとともに、総合支援学校の在校生のみならず卒業生にも多く参加いただけた。こうしたことから、指摘いただいた、生涯学習につなげていくことについても、一定の成果が得られたのではないかと考えている。

また、別の委員からは、東京オリンピック・パラリンピックを契機とした障害者スポーツの発信と比較し、障害者アートの発信が弱いという意見も出されていた。この点については、今回のくれたけまつりにおいても、アートに関する様々な取組が実施され、それぞれ、参加者が楽しんでいた様子がみられたが、今後とも、文化庁京都移転という機会も捉えて、本事業に参画いただいた「天才アート KYOTO」とのより一層の連携により、障害者アートの発信にも取り組んでいきたい。

併せて、総合支援学校以外の小中学校への情報提供の重要性についての意見もいただいた。こうした指摘に対しては、今後とも、ホームページやチラシによる発信はもとより、次年度以降は、ボッチャや卓球バレー等の用具の貸出しも含め、近隣の学校との交流をより一層進めることにより、取組の裾野を広げ、共生社会実現に向けた一助となるような取組を目指していきたいと考えている。

「余暇フェスタ&くれたけまつり」参加者アンケートから

当日の「余暇フェスタ&くれたけまつり」のアンケートからは、「参加してみてどうでしたか？」の問いに対して「楽しかった」との回答が8割を超えていた。とりわけ、「ご意見・ご感想」の自由記述においても、「とても楽しめました！また来ます。」「みんな笑顔、いい顔をしていた。世界中の人がこの子たちのように素直な心といい顔をしていたら争いは起こらない！」等、また来たいという声や、共生社会を願う思いを寄せていただいた。こうしたアンケート結果からも、本取組が総合支援学校の恒例行事として定着してきたこと、さらには、今後ともこうした取組を継続していくことの必要性を感じることができた。

まとめにかえて（今後の展望）

本事業を通しては、主に共生社会の実現、そのための開かれた学校づくりに向け、「教育内容の充実」や「イベント実施による障害者理解の拡大」を進めてきた。まず「教育内容の充実」に関しては、初年度から専門家活用により指導の充実が図られてきた。今後も地域の指導者や専門家による指導・助言をいただくとともに、今後は文化的・体育的な地域交流を教育課程に位置付けることでさらに児童生徒への「教育の充実」が図られると考えている。教育課程へ位置付けることは、これまでの取組を一過性のもとしないうちにも極めて重要であり、交流する地域や学校での「障害者理解の拡大」につながると考えている。

また、イベントへの学校関係者や地域住民の参加状況は、「障害者理解の拡大」の状態を知る一つの目安である。本事業の成果をイベントへの参加人数で見ると、地域からの参加が着実に増えていることから、こうした取組により、実施校が「障害の有無や年齢・性別を超えた地域の共生社会の拠点」へと近づくことができた。今後は他の支援学校でも、子どもたちの交流を中心に、保護者や地域の方々との相互理解の広がりを進めていくことが可能であり、このような取組により共生社会の実現が近づくものとする。

本事業の目的を達成するためには、今後も地域に開かれた学校づくりを推進することが必要であり、実施校では、令和元年度から「スポーツ交流大作戦」として、学校と地域の連携・協働による地域コミュニティの構築を目指してスポーツ交流を柱にした授業づくりを開始した。令和2年度以降は、この取組をより充実させて各学部の教育課程に位置付けた取組にしていきたい。

今後も行政、地域の有識者・障害者芸術団体・障害者スポーツ団体と連携し取組を継続させたい。